

---

# 嘘つきはブタの始まり

モール

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嘘つきはブタの始まり

### 【Nコード】

N7119D

### 【作者名】

モール

### 【あらすじ】

「死神」と名乗る青年から「死神の資格」をもらった僕は、ある女性を助けるために病院へ行く。その後「死神」とは連絡を断っていたのだが、意外な形で再会する。

その日、僕は死神になった。こんなことを言うと、頭がどうかしているんじゃないか、とか、今流行の自己誇大妄想だとか言われるかもしれない。もし誰か別の人が同じことを言ったら、僕はやはりその人の頭を疑うだろう。でも僕は死神に会い、そして言われた。「今日からお前が死神だ」と。そしてその日から僕は死神になった……らしい。

死神というのは黒いローブを着てフードを深く被り、身の丈より巨大な鎌を持ち歩いている、というのが今までの僕のイメージだった。なぜそのようなイメージを、と言われてもわからない。テレビの番組で見たのかもしれないし、小さい頃親から聞いたのかもしれない。とにかく、そんなイメージは全くの間違いだった、というのが今日わかった。死神は普通の人間と変わらない。日本語だって話すし、鎌など持ってもいない。笑いもするし、怒りもする。それがわかった。もつとも、わからないことの方が圧倒的に多かったのだけれども。

「今、ちよつと時間あるか？」

死神は初め、そういつて話しかけてきた。僕が大学から帰る途中、家まであと1分という横断歩道で信号待ちをしていたときだ。もつとも、そのときは話しかけてきたのが死神なんて僕は想像すらしなかった。

「え？　僕？　……なに？」

「お前さ、死神っていると思うか？」

あいつはそういうと、にっこりと笑った。歳は僕と同じか少し上、

おそらく二十代前半だろう。どちらかといえば女性的な、整った白い顔をしていた。その声を聞かなければ、ひよつとして女だと思っただかもしれない。その笑顔とセリフがあまりにかけ離れていて、間抜けにも僕は聞き返していた。

「え？ シニガミって？」

「だからさ、死神だよ。ほら、人が死ぬとき、魂を持っていく奴」

僕はあつけにとられていた。初対面の相手に話す内容だろうか？

この男は何を言い出すんだろう？ これは宗教か何かの勧誘か、もしくは何かオフダでも買わされるんじゃないだろうか？

そんな心の内を見抜いたように、あいつは言った。

「別にからかってるわけじゃないんだ。そんな顔するなよ」

からかってるわけじゃない、といいつつも、あいつは絶対僕の反応を楽しんでいた。今ならわかる。だから敢えて始めから、あんなわけのわからない質問をしたんだ。

「はあ。死神ですか。……とりあえず、見たことはないな」

早く話を終わらせて、さっさと家に帰ろう。そう思った。この時点では、変なやつに変な質問をされた。それだけで済む、はずだった。

「ふうん。見たことはない……ね」

あいつは真顔になり、それからまた笑顔を浮かべた。変なやつだとは思ったが、その笑顔はなぜか、決して嫌な感じはしなかった。むしろ穏やかな気持ちになるというか、不思議な魅力があった。おそらく僕が女性だったら、少しは気持ちが傾いてしまったんじゃないだろうか。

「死神ってさ、今、お前の目の前にいるんだけど」

「は？」声が裏返った。

次のセリフは、今思い出しても笑いが込み上げてくる。なんてバカなんだ。あいつも、僕も。とにかく傑作だった。

「だからさ、俺が、その死神。はじめまして」

こうして僕は、死神と出会った。

「えっと・・・え？どういうこと？」このときの僕の反応は一般的に見て正しかったはずだ。ここで事態を把握できる者などいるわけがない。大抵は僕と同じ反応をするか、もしくは走って逃げ出すかどうかだろう。

「つまりお前は今、死神と話している。で、死神である俺はお前に用があつて話しかけている。こういうこと」

何を聞いても謎掛けで返ってくる気がした。ここで逃げ出さなかったのは、死神の笑顔が安心できるものだったからという理由だけだ。不思議と、怖いとか気味が悪いとか、そういう感情は湧いてこなかった。

「つまり僕はもうすぐ死ぬ。で、死神である君は僕を迎えに来たつてことだ」

精一杯のジョークで返したつもりだ。僕は昔から騙されやすい性格だったから、嘘をつかれることは多かった。だからこういう冗談を受け流すことなら長けているつもりだ。もっとも嘘を見抜くことに關しては相変わらず幼稚園児並だったが。

僕のこのセリフに、死神は少し思案する表情になった。そしてこう言う。

「いや、そういうわけじゃない。実は死神の資格を譲りに来た」

「死神の資格？」

僕は呆れるでもなく、驚くでもなく、警戒するでもなく、ただ、笑ってしまった。死神に資格なんてあるのか。なんだこの作り話は「いえ、結構です」

笑いながらそう言う。死神は気を悪くした様子もなく、むしろ人懐っこい笑みをその目に浮かべる。僕が警戒しているわけではないと感じたのだろう。

「お前さ、俺の言うこと信じてないだろ」

信じるという方が無理な話だ。

「まあしょうがないかな……いや、こういう反応とは思ってもみなかったな」

死神はブツブツ言っている。僕は質問をぶつけてみた。

「死神の仕事ってどんなことしてるの？ 資格って？」

「お、信じる気になったか？」

「全然」

死神はここで、あつ、と声を上げた。証拠見せてやるよ、そう言っただの。

「証拠？」

「そう、証拠。俺は、人がいつどうやって死んだかわかる。それを教えてやるうってわけ。そうだな、ほら、昔ブレイクした『BLUE』ってバンドあったろ？ あのボーカルが今日、死んだ。死因は交通事故だ」

「『BLUE』？」聞いたことあるようなないような。

「でも、それをどうやって証明するんだ？」

死神は笑って言った。このセリフも傑作だった。

「今日の夕刊に載るはずだからさ、俺、家から取ってくるよ」

家？ 夕刊？ 死神が？ 僕は耐え切れなくなつて大声で笑った。おもしろい奴だ。要は友達が欲しくて話しかけてきたんだろ？

こんな奴なら友達に居てもおもしろいかもしれない。死神が友達なんて最高だ。

2時間後、僕はまたあの横断歩道にいた。夕刊が届くのがだいたい4時半だというので、5時にまたここで待ち合わせることにしたのだ。つまり僕の家と死神の家はわずか三十分の距離、ということだ。律儀に申し出を受ける必要はもろくなかったが、真実が気になったのと、あいつに少なからず興味があったのは事実だ。

そして5時。死神が現れた。死神ならもつと神妙な顔をしていれ

ばいいものを、満面の笑みを浮かべている。僕に気付くと手まで振ってきた。なんなんだ、あいつは。

「ほれ、見てみる。ここ」乱雑に切られた記事を見せられる。切るならもつとちゃんと切ってこい、そう言いたいのをぐつと我慢する。小さい記事ではあったが、そこには確かに午後3時半頃、『BLE』のボーカルが交通事故で即死した、と書かれていた。3時半といえば僕が死神からこの事故のことを聞かされた「後」じゃないか。必然的に、死神はこの事故を予見していたということか。

「な、ほんとだったろ」そういつて死神は新聞の切り抜きをすばやくジーンズのポケットにしまうと、スタスタと歩き出した。呆然としている僕に気付くと、「ほら、早くしろよ」と付いてくるようジェスチャーする。

「え？どこに？」

「腹減ったからファミレス。そこで、仕事の打ち合わせ、やるから。」

死神も腹が減るんだな。それも今日わかったことこのリストに加えておこう。

僕はもともと疑い深い方ではない。こういう証拠を見せられたりする、なおさらだ。

だが、ちよつと待てよ、と思う。まだ僕は死神の資格を持つことに承諾したわけじゃない。しかしこの様子だとそれも時間の問題に思えた。

死神はチーズハンバーグセットとグラタンを、僕はパスタを頼んだ。これから死神の仕事の話をするというときに、なんとも現実味の無いシチュエーションだ。

「そついや、名前聞いてなかったな」スープを飲みながら死神は言

った。

「……青崎稔」

「ミノル、か」早くも下の名前で呼び捨てだ。

「あの……そっちは？」

「俺？俺は『死神』でいいよ」

なんなんだ、こいつは。しかもやっぱりこちらの反応を楽しんでいる。

「ミノルの好きなミュージシャンは？」

「は？それが仕事とどういう？」怪訝そうにする僕を見て、死神は笑って答える。

「まあ、いいだろ。世間話だ」

「……コブクロ」

「好きな食べ物？」

「……肉じゃが」

「好きな色」

「……青」

「好きなデートスポット」

「……なんなんだよ、この質問攻めは」さすがに怒った。

「悪い、仕事をこれからお任せする奴のことを何も知らないっていうのもなんかさ……」そして意味ありげな笑顔を浮かべる。その笑顔を見せられると、こっちは言葉に詰まる。

しかし言いたいことは山ほどある。まず、仕事をお任せされた覚えは無い。それに、何も知らない赤の他人にはじめに声を掛けてきたのは他でもない、死神自身だ。

「で、仕事っていうのはさ……」

ハンバーグを口に運びながら、死神は言う。ほんと、旨そうに食べる。こっちまで自然と食欲が出てくる。まるで今までロクなものを食べてなかったみたいだ。

「ちょ、ちよつと待って。まだやるとは言っていない」死神の食べっぷりに気を取られて肝心なところを言いそびれるところだった。危



ない危ない。

「死神の仕事って、もうすぐ死ぬ人のところに行って、魂を取ってくるんだろう？ そんな仕事やりたくないよ」

僕にしては奇跡的なほどきっぱり言っただけだった。いつも勧誘や説得には弱いのだ。こないだも一人暮らしにはそぐわない巨大な浄水器を買ってしまったばかりだ。

僕のこの答えに、死神は無言でかぶりを振る。それから違つよ、  
と言いつける。

「死神にもいろんな部署があつてさ、いいか、俺が・俺らが担当するのは『生存部門』だ」

「生存？」その時点で死神という名前と矛盾してるじゃないか。

「そう、生存。もともと死神の主な仕事は、お前が言った通り、寿命の近いものをキチンと黄泉の国に連れて行くことだ。それが行なわれないと、この世界が魂で埋め尽くされてしまふからな。ただし」

そこで死神は言葉を切り、僕を見つめる。

「寿命が決まつていても、黄泉の国へ連れて行かない相手もいる。

5人に一人くらいだな。そいつのところへ行つて、すいませんがあなたは連れていきません、と説明するのが俺らの仕事だ」

しばらく僕は考え込んでいたと思う。頭を整理し、質問する。

「よくわからないんだけど……。寿命が来ても死なない人がいるの？ どうして？ その人は結局どうなるの？」

「質問だらけだな」死神は苦笑する。当たり前だ。すんなり理解できる奴がいたらアインシュタインより天才だ。

「つまりだ、死神にも犯罪をする奴がいる。寿命じゃ無い奴を黄泉の国に連れてきてしまふんだ。まあ死神の社会に犯罪とか法律とかそんなのは無いんだけどな。とにかく、秩序を破って自分の気に入らないやつを連れてきちゃうんだよ」

「いい迷惑だな」

「こつちにとつてもな。で、そうなるとどんどん黄泉の国がいっぱいになってきちゃう。そこで作られたのが生存部門。本来は寿命で

黄泉の国に来るはずの奴を、特別に生かしておくってわけさ。これで均衡が保てる。予定外に死んでしまう奴、予定外に生き延びる奴、その数は同じでなきゃならないんだ。今は予定外に死んじまう奴が多いから、寿命が来た5人のうち1人は助けてやらないといけない」

水の換えを入れてくれたウェイトレスが、黄泉の国、という単語を聞いてビクツとしたように一瞬だけ死神の顔を見た。死神はそんなことにした様子も無い。

「で、その5人に1人に選ばれた奴は、また別の寿命をあてがわれて生きていくことになる」

「ふうん。でもさ、そんな面倒なことしないで、その悪い死神のせいで予定外に死んじやった人を、蘇らせればいいだけじゃない？」

悪い死神、というのも言い方がおかしいかもしれないが。

「それは　予想に反し、死神の顔に狼狽が走る。

「それは出来ないんだ。一度死んだ……つまり魂を抜かれた奴を元に戻すことはな。だから代わりに他の人を助けてやろうってわけさ」

「死神が人助けねえ……。ま、生存部門っていうのはわかった。つまり、死神の世界の都合で、寿命で死ぬはずの人間が5人居たら、そのうちの一人は助けている、というわけだね」

「わかったか」いつの間にか、死神はハンバーグを全て食べ終えていた。

「でも、やるとは言っていない」

「意外と頑固だな、お前」

「5人に1人っていうのは、誰が選ぶの？」

「当然、生存部門の死神だ。つまり俺らだ」

「つまり5人のうち4人は見殺しにするんだろ？」こんな会話をまた聞かれたらやっかいだな、そんなことを思った。幸いウェイトレスが来る様子は無い。

「違う。もともと寿命で死ぬ人たちなんだ」

「でも結果として救えるのは一人だけじゃないか。そんなことなら・

」

「みんな死んじまえていうのか」

突然の大声にびっくりした。死神の目は真剣だった。真っ直ぐに僕を睨み付けている。言葉が返せなかった。

「いいか、救える人がいるんだ。お前が何もしなきゃ、そいつは死ぬんだよ。それでもいいのか」

無茶苦茶だ、そう思った。泣き出したい気分だった。もともと寿命の人だと言ったのは死神じゃないか。それに、なんで僕が？ 他の奴に代わってもらえたらどんなにいいか。そもそもなんで死神はその資格を譲らなくてはならないのか。それに死神のくせに、人を助けるだとか、わけがわからない。

「なんで僕なの？」声が震えた。

「……悪かった。ちょっと焦ってたんだ。俺はもうすぐ 異動になるし、この生存部門って人気ないんだ。だって、死神らしい仕事じゃないだろ？」そういつて死神は照れたような顔をした。

「でも俺は好きだったんだ、この仕事。お前を選んだのは、・・・俺の直感だよ」

僕は考えた。ここしばらく使ったことのない、脳の端っこから端っこまでを使って考えた。でも考えたって何か答えが出るわけじゃなかった。わかったことは一つ。僕はこの仕事を引き受けるだろうな、ということだ。

「・・・で、その仕事は具体的にどうすればいいの？」

ほら、断れない。

死神は少しだけ、ほんの少しだけ驚いた顔をしてから、目を細めた。

「ありがとう。今日からお前が死神だ」

こうして僕はその日、死神になった。

仕事内容は、極めて単純だった。寿命の来た人間の元に行き、寿命が延びました、という内容を伝えるだけだそう。それだけで本来死ぬはずだった人間が救われるらしい。

「で、給料は貰えるの？」僕は半分冗談で、半分は本気で聞いた。

「それは・・仕事次第だな。ただし、金じゃない」

お金じゃないなら、なんだっていうんだ？死神はそれ以上は教えてくれなかった。

「俺も生活が苦しくてさ、バイトしてるんだ」

死神がバイト？ どこまでも人間臭い奴だ。

「何のバイト？ あ、わかった。占い師とか？」

「惜しい。数学の家庭教師」

僕はあやうく飲んでいたコーヒを吹き出しそうになった。つられて死神も笑う。

「ねえ、一つ、確認しておきたいんだけど」僕は言った。

「なんだ？」

「ほんとにこれ……嘘じゃないよね？」

死神は腕を組んで思案する顔になった。そして僕を真っ直ぐ見つめて言う。

「俺は嘘は絶対つかないんだ。嘘をつくから豚にされる」

「何それ？」聞いたこともない。

「知らないか？嘘を付くと、閻魔様に豚にされるんだよ。死んでからな」

それが一番嘘っぽいけれど。でも死神は真顔だった。そこまで言われると反論する気にはなれなかった。正直、まだ半信半疑だ。でもそれを言ったところで、死神の反応は予想できた。ニヤリと笑って、「まあじきにわかるよ」、そんな風に言うだろう。

初仕事はその3日後に決まった。朝9時に、前と同じファミレス

に集合となった。僕が中に入ると、死神はサンドイッチを食べているところだった。

「お、ミノル、先に食ってるぞ」

死神は青い長袖シャツにジーンズといった、ラフな格好だ。これだけ見ると、休日に友達と遊びに行くのと何ら変わりはない。

僕は黒い服を着ていった方がいいのかな、なんてことを真剣に考えていたというのに。結局無難に茶色のパンツに茶色のジャケットを選んだ。

ファミレスで軽く朝食を摂ると、僕らは外へ出た。今日は晴天だ。春の風が心地よい。

「じゃあ行くか」

そこらに買物でも、そう続きそうな軽い調子で死神は言った。

「まだどこに行くか聞いてないんだけど……」

「そっか。まあ、死神の仕事場といえばだいたい決まってるだろう？ 人は大抵どこで死ぬと思う？」

あ、そっか、と思った。

「病院か」

「正解！」

徒歩で15分ほどで目的地である某総合病院に着いた。そこからの「仕事」がまた可笑しかった。間抜けだった。

休日のためか、中は意外と見舞い客が多かった。もっと辛気臭いイメージがあつたけど、廊下では患者と家族が談笑していたりと、思ったより明るい雰囲気だった。

「あのさ……これから行く患者さんは、どういう人なの？ 本当は寿命で死ぬ人なんだよね？」ずっと聞きたかったことを今、やっと聞いた。

「なんだ、聞かれないから別に知りたくないのかと思ってたよ」死神はそう言って悪戯っぽく笑った。

死神の話によると、こうだ。

これから向かう410号室に居るのは、星野香澄と言う女性。21歳。急性白血病で、医師からは予後は厳しいと言われているらしい。今は化学療法、つまり抗癌剤に望みを託している状態だ。

これを聞いて、死神が自分からその患者について話さなかったことに納得がいった。きつとわざとだ。

その星野香澄と言う女性は僕の知り合いだった。きつと死神はそのことを知っていたんだ。どうして知っていたのか、というのはわからないがそんな気がする。いや、そうに違いない。

知り合いと言っても、同じ大学のクラスメートというだけで、特別仲のいいわけでもない。何回か飲み会で話したことのある程度だ。おとなしくて気弱な子、という印象しかない。それと……そうだ、確か大学2年の冬頃から学校に来なくなった。いつもは一番前で授業を受けていたから、いなくなるとすぐわかった。他にも大学に来なくなつた奴はいたから、特に気にもしなかったけど、まさか入院していたなんて……。

いろいろ考えていると、急に気が重くなった。正直に言うと、怖気付いた。全然知らない人ならまだいい。クラスメートである僕が病室に入つて、「実は俺、死神になつたんだ」なんて言つたらどうなるか。星野さんは他人を馬鹿にするようなタイプじゃないだろうけど、ちよつと頭がおかしいんじゃないのか、なんてことは絶対思うはずだ。僕だつて死神のことを（今では死神の資格を僕に譲つたらしいけど、僕はまだ彼のことを死神と呼んでいた。名前も知らなかったし。）初めはそう思つたんだから。

僕の気持ちをわかつているのかいないのか、死神は先を進む。広い病院でまるで迷う様子も無い。死神の仕事場が主に病院というのはどうやら本当らしいな、と僕は思った。

「さ、ここだ」

見ると、『410号室 星野香澄』とプレートが出ている。個室らしい。重病患者や、お金のある患者が個室に入ることは僕でも知

っている。星野さんは前者だろう。面会謝絶になっていることを心配したが、どうやら大丈夫のようだ。

僕は息をひとつ付くと、死神の方を見た。さあ、入ろう。

しかし死神は腕を組み、壁にもたれ掛かって僕を見ているだけだ。まさか。

「……僕一人で？」

「当たり前だろ、俺が行っても何もできない。死神の資格はお前に譲ったんだから」

……嘘だろ。

「え……でも、星野さん　ここの患者に何て言ったらいいの……手本とか、普通あるだろ？」必死に説得しようとするが、言っても無駄なことくらい短い付き合いの中で学んでいた。

死神は無言で顎を動かす。（早く行け）

……まったく、偉そうに。

僕は促されるままドアの前に行き、ノックをした。

「はい」

細い声が聞こえる。確かに星野さんだ。微かに覚えている。

僕は中に入った。その時の心境は……そうだな、これから素顔でサーカスをするピエロのようだった。神様、せめて僕にメイクを。でも、今は僕が死神という神様なんだ。じゃあ、誰に頼めばいいんだろう？

4

「こんにちは。元気？」

馴れ馴れしいかな、とも思ったけどそう声を掛けた。このときばかりは、多少なりとも知り合いで良かったと本心から思った。初対面だったら何と言っていいのかわからない。

「あ……青崎くん……」

星野さんは本当にびっくりしているようだった。読みかけの本を手を持ったまま、目を見開いた。

「どうも。久しぶり」やっぱり何て言ったらいいのかわからない。

「どうして・・ここが？」星野さんの声に不信感や嫌悪する様子は感じられず、むしろ喜んでいるように聞こえたのが僕を勇気付けた。

「あ、あの、知り合いに聞いて。入院してるっていうからさ」

「知り合い？」

星野さんはわずかに眉を潜め、それから何かを思いついた顔になった。クラスメートの心当たりでもあったのだろう。僕は何も言わずにおいた。

「いつから入院してるの？」言ってから、見舞いに何も持ってきてないことに気付いた。

「もう2ヶ月になるかな。私の病気のことは聞いてる……よね。今は抗癌剤やって。その効果がわからないから、なかなか退院できないのよ。でも食欲もあるし、散歩も許されてるのよ」

白い頬をわずかに紅く染めながら、彼女はそう言った。死神と初めて会ったときも、その血の気の無さにびっくりしたが、彼女も似たようなものだった。

しばらく世間話をした。彼女はよく笑い、よくしゃべった。それが僕の中の得体の知れない不安感をかえって増幅させる。

「退院したらさ、ドライブでもどう？」

僕にしては珍しく、そんな誘い文句が自然と口をついた。頷くかと思っただけ、彼女は目を伏せると、呟くように言った。

「わたしね、もう長くないのかもしれない。今回の入院が最後になるかもしれない。でももし退院できたら、行きたいな」

胸が締め付けられた。死んで欲しくない、本気でそう思った。星野さんはもう覚悟を決めているのだろうか？生きることをもう諦めているのだろうか？

そんなはずはない、と思った。きっと我慢しているんだ。悔しくて、怖くて、泣き出したいのを。



僕だったらきつと、喚いて絶望して、全てを投げ出しているだろう。

どうしても、自分が死神の資格を取ったことなど言えなかった。冗談にしては笑えない。馬鹿にされたと思って怒り出すかもしれない。しかしここで、彼女が思いもかけないことを言った。そのときは奇跡だと思った。もしくは彼女は人の心が読めるのだと。

彼女はこう言った。

「死ぬときってね、死神が枕元に迎えに来るのよ。それでね、人にはもう寿命が決められてるから、死神に逆らうことは絶対できないの」

後になってわかったことだが、星野さんは、人が死ぬ時に死神が迎えにくると本気で信じていたようだ。他人からすれば馬鹿らしいことかもしれないが、どうしても払拭できない迷信が誰しも一つはあるものだ。僕だって夜に爪を切るのは良くないことだと信じてるし、そう、あの死神だって嘘を付くと豚にされると信じてたじゃないか。

とにかく、この後、僕は自分が死神の資格を譲ってもらったこと、寿命は先に延びることを告げた。

「だから、星野さんの病気は必ず良くなるんだ」最後にそう言った。どれほど信用してもらえたかはわからない。きっと、自分を元氣付けるための嘘だと思っただろう。けれど、それでも良かった。

「じゃあ、ドライブ、行けるかな？」目の淵を赤く染めて、彼女はそう行つた。「行けるよね、行きたい」

彼女の心の、仮面が剥がれた気がした。

涙を拭う彼女を見て、なぜだろう、この時、キレイだと思った。

これもずいぶん後になってわかったが、大学にまだ通っていたころから、彼女は僕に好意を寄せてくれていたらしい。そして僕は香澄と（今はもう呼び捨てにしている）付き合っている。もちろん退院してからすぐ、ドライブへも行つた。

そう、彼女は死ななかつた。僕が病院へ見舞いに行くたびに元氣を取り戻していった。医師の話によると、抗癌剤が思った以上に効いたそうだ。急性白血病は決して珍しい病気では無いし、抗癌剤の効きが比較的良いため、今では助かる率も高いらしい。しかし小児ならともかく、香澄ほどの年齢でこれほどの著効を示すことはずいぶんと珍しいことだったようだ。とにかく、香澄はよく言われる「医師もびっくりする程の」回復力を見せたのだ。

そして、大どんでん返しはこれだけでは無かつた。あれは・・何回目の見舞いの時だっただろうか。死神を病院で見かけた。「仕事」だろうと思つた。別の部署に異動になると聞いていたから。

実は、あれ以来死神とは会っていなかった。あの日だって、僕が病室から出てくると、「おつかれさん」とだけ言つてスタスタと自分だけ先に帰ってしまったのだ。もつとも、僕の赤い目（正直に言おう、僕ももらい泣きをしてしまった）を見て何かを察してくれたのかもしれない。

僕は死神に声を掛けた。一瞬、彼は嬉しそうな顔をし、それから言つた。

「よ、こないだの患者はどうだ？」

「あ・・。うん、どんどん検査の数値が下がってるって。もう食欲もあるし」

「そうか」まるで知っていたかのようにそっけない返事をしてきた。「あのさ」僕には、どうしても聞いておきたいことがあつた。

「僕が助けられるのは5人に1人だったわけでしょ、なんであの人だったの？」

……年齢が若かつたから。キレイだったから。小さい頃から病氣の再発を繰り返して可愛そうだったから。

いろいろな返答を予想した。ありとあらゆる返答を、だ。しかし死神はいつだって僕の上に行く。

「香澄は、俺の妹だからな」

イモウト。

初め、意味がわからなかった。やがてじわりじわりとその驚きが染み渡ってきた。

「妹？……ってことは、彼女も死神なの？」

ここで死神は、本当に楽しそうに笑った。廊下を歩いていた看護師が一度、たしなめるような目でこちらを見た。

「やっぱ、おもしろいわ、お前」

え？　どういうことだ？　僕にはさっぱりわからない。

「俺の言ったこと、まだ本気にしてたのか？　嘘に決まってるだろ、あんなの」

この時、僕は腹を立てても良かったのかもしれない。掴みかかって、ひよっとしたら殴りかかって良かった。でも不思議と全く腹は立たなかった。推理小説で、絶対こいつが犯人だと思っていたら、見事ラストで意外な結末が待っていた、そんな感じだ。「やられた！」という爽快感すらあった。

「え？　だって……あの新聞の切り抜き……」僕はまだあがいていた。

「ああ、あの『BLUE』のボーカルが死んだ時の？　あれ、昨日の夕刊の切抜きだぜ。うまく切り抜いて日付をわからなくしただけ。まあテレビで観て知ってたらどうしようか、と思ったけどさ」ワイドショーにもならないか、死神はそう小声で続ける。

望みは絶たれた。結局は、こういうことだったか。

「なんで嘘を？」死神の笑いが収まるのを待ち、そう質問する。

「俺の妹はさ、そういう迷信信じるんだよね。死神が来るとか、夜中の鏡がどうか、そういうの。だから、お前に頼んだ。死神役をね。まさか俺がやるわけにもいかなかったし。大変だったよ、あいつのお気に入りのクラスメートを探すのは」

急に赤面した。始めから僕を狙って声を掛けたんだ。おそらく香澄は、大学に気になる男子がいる、というような事を言っていたに違いない。

「ミノル、いいこと教えてやるよ。人に嘘を信じさせるテクニクだ。まず、自分がその嘘を信じる。いや、信じた気になる。それとその嘘を自信たっぷりに言うんだ。少しでも自信のなさそうな顔をしたり、弱気になったら駄目だ」

呆れた。今度は詐欺講座か？

「お前は、死んだら確実にブタにされるね」

お返しに言つてやった。

意外にも死神は真顔で「そうだな。それだけが気掛かりだ」と言い、また笑顔に戻る。

「香澄を頼むな」

そついうと、死神はまたスタスタと歩いていつてしまった。連絡先も、本名も言わず。最後の一言が、やけに印象に残った。

香澄と付き合うようになったのは、その後のことだ。

5

それから何ヶ月か、僕は死神と会うことはなかった。考えれば当たり前かもしれない。名前も知らないし、連絡先も知らない。ただ、付き合っている彼女の兄だということがわかつていただけ。香澄も死神の話はしなかった。余計なことは言つな、といわれているのかもしれない。

付き合つて半年くらい経った頃だ。香澄から電話で、「話したいことがある」と言われて、外で会った。あいつの 死神のことだった。

410号室には、「星野健二」とプレートが出ていた。半年前には香澄が居た部屋だ。

香澄から、兄が入院していることを告げられた。絶対に言うな、と言われていたから、僕には言えなかったらしい。しかし先日の検査の結果で、抗癌剤の効果がほとんどなく、腫瘍マーカーも上昇していることが医師から伝えられたそうだ。つまり回復の見込みはほとんどない、ということらしい。それを聞き、強く口止めされていたものの、僕に話す気になったようだ。

皮肉なものだ。そう思う。

わずか半年前に、妹が奇跡的に助かったというのに、今度は兄か。考えてみれば迂闊だった。兄妹なんだから、同じ病気を抱っこしているもおかしくない。それにあいつの顔色は異常なほど真っ白だった。白血病だというなら納得がいく。

「香澄を頼むな」

最後の言葉を思い出し、奥歯を強く噛む。もしかして、妹を任せることが、死神流の「給料代わり」だったのだろうか？

ドアをノックした。

「はい」という短い返事がくる。

中に入ると、死神がベッドに仰向けに寝て、顔だけこちらに向いている。僕を見ると少し驚いた顔をして、それから顔を背けた。「言うなって言っただろ」そう呟くのが聞こえた。

「よ、元気かい」わざと明るい調子で聞く。

「何しにきたんだ」

「香澄から聞いたよ。何で教えてくれなかったんだ」

「教える？ 何をだ？ お前、俺のこと笑いにきたのか？ 死神だって名乗った奴が、今はこうしてベッドに寝たきり、死の淵だ。お笑い種だろ」

あの憎めない笑いを浮かべる死神の面影はなかった。全体的に痩せ、顔色も一層白くなった。声にも以前の明るさがない。

やはりこういうとき、なんて声を掛けていいのかわからない。

最後に病院で会ったとき、既に病氣のことを医師から聞いていたんだろう。それで僕に「香澄を頼む」と言っただの。必死で笑顔を

繕い、僕と別れ、それ以降は会うのを止めた。弱っていく自分を見られたくなかったのか。

「なあ、死神っていると思うか？」しばらくの沈黙の後、僕はそう言った。

死神は顔をこちらに向けた。何を聞いているんだ？ 目はそう言っていた。

「僕はまだ死神の資格を誰にも譲っていない」

「ふざけるな」

「ふざけてなんかいない。死神である僕は、誰を助けるか決める権限がある」

長い沈黙があった。

「死んでからブタになるのは俺だけでいい」呟くように死神は言った。「お前までおかしい嘘をつくのはよせ」

僕は長く息を吐いた。

……その嘘を自信たっぷりと言うんだ。少しでも自信のなさそうな顔をしたり、弱気になったら駄目だ……あいつは前に、そう言っていた。

「死神、お前はブタにはならないよ」

死神は鼻で笑った。

「俺が、お前にいくつ嘘を付いたと思う？ 数えるのも馬鹿らしいくらいの数だ」

「でも」そこで僕は言葉を切った。

「でも、お前の妹は助かった。過程は嘘でも、結果は本当だった」

死神は僕の顔をまじまじと見つめる。やがて、顔にわずかに笑みを浮かべ、呟く。

「お前って、ほんとおもしろいな。香澄も男を見る目があるんだな」そして真顔に戻る。

「でも、運が良かったのはここまでだ。香澄が助かっただけで奇跡だった。それだけで良かったと俺は思うよ。2度目の奇跡は無い」

「残念だな」

僕は余裕の笑顔を見せる。

「残念だ。そんな覚悟を決めるのはかつこいいかもしれないけど、結局お前は助かるんだ。これは本当だよ」

息を吸う。

「僕は、ブタになるつもりはない」

自信たっぷりと言ってやった。

やがて声を殺した、喉をクックと鳴らすような笑いが聞こえた。

それは体を揺らす笑いとなり、しばらく死神は笑い転げた。

「俺の言った『嘘を信じさせる方法』、いつの間にマスターしたんだ？」

「今、さっきね」

「まったく、とんだセンスだよ。将来有望な詐欺師だな」

自分のことは棚に上げて、言いたい放題だ。

死神の笑いが収まると、静寂が病室に訪れる。その静寂は事実のみを鮮明に浮かび上がらせる。ベッドにいるのは抗癌剤の効かない白血病患者。そして僕は、口だけの、何も出来ないただの人間。

拭いようのない重い事実がこの部屋には漂っている。その澱んだ空気を入れ替えるように、死神が口を開く。

「……俺さ、まだ生きれるかな？」真っ直ぐ僕を見つめる。

「……大丈夫。僕を嘘つきにしないでよ」こんなことを言うのは無責任なのかもしれない。けれど……これは僕の希望だ。死神が弱気になっている今、僕が信じなくちゃいけないんだ。

「香澄の結婚式くらいは出ないとな」死神が言う。

「そうか、特別に招待してやろうか」

「馬鹿、俺はあいつの兄貴だぞ。お前こそ、早くもあいつの媚気取りかよ」

僕は赤面する。どうも真面目な顔でこんなことを言えない性分なのだ。

「いや・・結婚はまだ・・。当分先かな」

「しょうがねえな。まだまだ生きないといけないわけだ。妹の、だらしない彼氏のせいだ。」

そしてさっきと同じ質問を繰り返す。俺さ、まだ・・生きれるかなあ？

死神の目の端から、涙が落ちた。奴が泣くのは初めてだ。まったく、兄妹揃って涙もろい。そういう僕の目頭も熱くなった。

死神は泣きながら、無理に笑おうとするものだから、顔が歪んで、すごいことになっていた。

鼻だけ赤くなった、白い顔を見ながら僕は言ってやった。

「お前、今、顔がブタみたいになってるぞ」

「うるせえ」

二人して笑った。



**（後書き）**

感想・ご意見よろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7119d/>

---

嘘つきはブタの始まり

2010年10月8日15時51分発行